

長野県立歴史館たより

2017年 秋号 vol.92

特集

秋季企画展

進化する縄文土器
～流れるもよう～と区画もよう～



Photo T. Ogawa

Photo T. Ogawa

進化する縄文土器 ~流れるもようと区画もよう~

I 進むデコボコかざり

縄文時代中期中葉初頭（約5,400年前）、土器に土偶やヘビの造形物などを貼り付ける「デコボコかざり」が始まりました。



富士見町藤内遺跡
重要文化財 複製 当館蔵

この時期を取り上げた平成26年度「縄文土器展」に続き、本展では、土器装飾がさらに進化をとげる約5,300~5,100年前（中期中葉中頃）にスポットをあてます。

みなさんをお迎えする富士見町藤内遺跡の土器には土偶が装飾としてつけられています。前時期に比べ土偶は大きく、精巧に、他の装飾と合成・合体しています。こうした動きを進化と表現していきます。

土偶が精霊（カミ）像だとすると、土器に宿る精霊とは違ったはずです。そのため、両者を合体させる発想が生まれた当初は、目立たない小さな土偶でした。ところが、合体することが地域社会に受け入れられると、急速な進化をとげました。

次々と生まれる装飾が受容され、進化をとげる時代や社会の高揚感を土器から感じてください。



焼町式土器（焼町遺跡）
塩尻市平出博物館蔵



勝坂式土器（下ノ原遺跡）
茅野市尖石縄文考古館蔵

II 信州を二分した土器のかざり

土器装飾が華やかになる傾向は、日本列島全域で見られます。ところが、その方向性や程度は地域ごとに異なっていました。

信州では八ヶ岳連峰などを挟み、(1) 流れるもようを軸にする東・北信、(2) 区画もようが基本の中・南信で、驚くほど違う装飾が流行します。

流れるもようの胎動は、約5,500年前（中期中頭）の新潟県上越～北信の山間部で起こります。約5,300~5,100年前（中期中葉の中頃）には、北陸～新潟県や群馬県などに広がり、各地で個性豊かな土器が生まれました。東信では、御代田町川原田遺跡などの焼町式土器が完成の域に達します。

区画もようは、約5,400年前の中期中葉初頭に諏訪～西関東で生まれます。約5,300~5,100年前、勝坂式土器の中頃（藤内～井戸尻式前半）の時期に急速な発展をとげます。

企画展示室の左右を見比べ、各地の個性的な土器をご覧ください。



Photo T. Ogawa

人体装飾付土器
（一の沢遺跡 重要文化財）
山梨県立考古博物館蔵

III 流れるもようの世界

北陸では、直線的な縦の軸線が基本でした。これが横流れを起こし、渦巻き文と合成、流れるもようが成立します。

石川県上山田貝塚の上山田式土器、富山県天神山遺跡の天神山式土器です。これらは、六



うらやまてらぞう

上山田・天神山式土器（浦山寺遺跡）
富山県埋蔵文化財センター蔵



Photo T. Ogawa

立体的な焼町式土器
(川原田遺跡)
浅間縄文ミュージアム蔵



Photo T. Ogawa

鶏頭冠把手の萌芽
(堂平遺跡)
津南町「なじよもん」蔵

反田南遺跡など、新潟県の沿岸地域まで広がりを見せます。

新潟県の内陸部～東・北信では、北陸に比べて粘土紐や突起を多く使い立体的になります。焼町式土器とその類縁関係の土器で、新潟県五丁歩遺跡、野首遺跡、中野市千田遺跡などです。

また、新潟県中越の津南町堂平遺跡では、火焰型土器の鶏頭冠把手の萌芽が見られます。

Ⅳ 区画もようの世界

代表的な区画・分帯方法には、横方向と縦方向の2者があります。

横方向の区画文は、中期初頭の直線的な軸線が屈曲を始めることで、独自に成立しました。

一方、縦方向の区画文は、前時代に北陸の縦方向の文様を採り入れ、オリジナルな区画文へ進化させました。折しも、この地域で縦方向の区画文が流行する頃、本場の北陸では縦方向の装飾が姿を消し、流れるもようが主流となっていました。



横の区画もよう
(荒神山遺跡)
諏訪市博物館蔵



縦の区画もよう
(釈迦堂遺跡 重要文化財)
釈迦堂遺跡博物館蔵

富士見町藤内遺跡、山梨県^{いもじや}鋳物師屋・一の沢・^{しゃかどう}釈迦堂遺跡の重要文化財をご堪能ください。

Ⅴ 顔がつく土器、動物がつく土器

区画もようの世界では、人面・人体、動物装飾付土器も盛んに作られました。個性豊かな顔、動き出しそうなへびなどの表現力を鑑賞ください。



顔のつく土器
(竹宇Ⅰ遺跡)
北杜市考古資料館蔵



全身を描いた土器
(鋳物師屋遺跡 重要文化財)
南アルプス市ふるさと文化伝承館蔵

Ⅵ 運ばれた「地域の顔」

この時期、土器装飾の進化は地域の独自性が強まる方向で進みましたが、それらは、交易等を通じて各地に運ばれていきました。

常設展示室では、交易拠点とみられる岐阜県^{さくら}桜^{ぼらじんでん}洞神田遺跡や塩尻市^{つるのみや}剣ノ宮遺跡。黒曜石原産地に近い^{おおにたん}長和町大仁反遺跡に、各地の土器が持ち込まれていたことを示します。あわせてご覧ください。

重要文化財6遺跡19点が集合

本展では、文化庁「平成29年度重要文化財等公開促進事業による勧告出品」を受けた重要文化財6遺跡19点を含む92点が企画・常設展示室に集合します。

地域ごとに進化した土器装飾の違いや似ている点を見て、感じてみてください。そして、異なる感性や技を強調しながらも、交流を通じて豊かな社会を築いていた縄文人の生き方に触れていただければ幸いです。

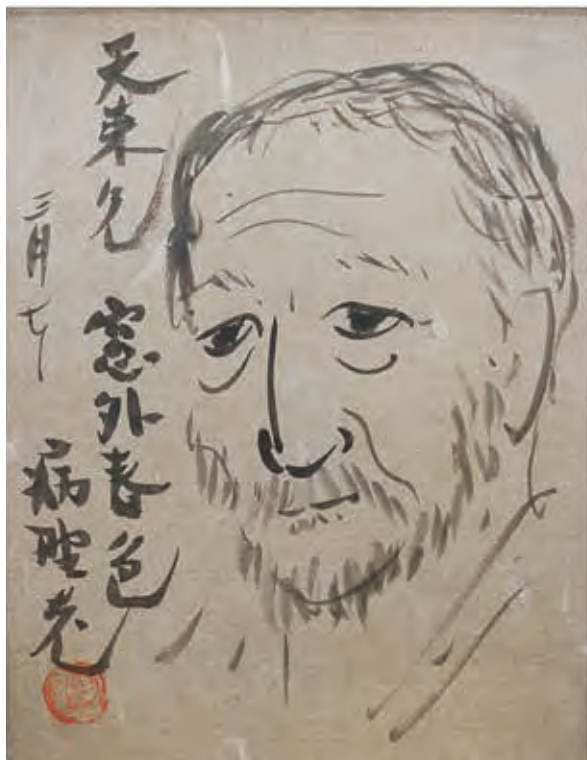


Photo T. Ogawa

^{どうくんまえ}道訓前遺跡 重要文化財
渋川市北橘歴史資料館蔵

文献史料をよむ

没後80年 ジャーナリスト木下尚江の自画像



木下尚江自画像（昭和12年 当館蔵）

木下尚江^{なおえ}自画像が新しく当館に収蔵されました。

木下尚江（1869～1937）は松本天白町松本藩士木下秀勝の子として生まれました。1888（明治21）年東京専門学校法律科を卒業し郷里の松本に帰ると、「信陽日報」記者となります。大日本帝国憲法発布の前年のことです。

尚江の思想は社会主義、そしてキリスト教人道主義に根ざしています。まず初恋の女性が前近代的な家制度の犠牲となり尚江の在京中に不幸な亡くなり方をしたことが、弱者である女性救済への鋭い関心を生みました。1891年松本で禁酒会をつくり、しばしば穂高の相馬愛蔵や井口喜源治などの禁酒運動^{はいしやう}、廃娼運動と連携しました。

尚江は妹伊和子の影響でキリスト教に帰依しました。尚江は1897年普通選挙運動をおこし、恐喝詐欺容疑で入獄してしまいます（無罪）。その際伊和子が尚江に差し入れた聖書に英文で「神の愛常に汝に伴う」と書かれていたことに感銘を覚

えます。尚江の信仰は、以後彼の言論活動の大切な基盤となっていきます。

1899（明治32）年、毎日新聞社に入社し、引き続き廃娼論、足尾銅山鉍毒問題、政官界の汚職に関する記事の執筆に力をそそぎます。ヒューマニストとして「公正な社会の実現」が尚江のめざす目標だったといえます。とくに近代日本最大の公害事件足尾鉍毒事件の告発者田中正造を敬愛し尊敬していたことはよく知られています。

1901（明治34）年社会主義者^{かたやません}片山潜^{こうとく}、幸徳秋水^{しゅうすい}らとともに尚江は日本初の社会主義政党「社会民主党」創立者の一人となりました。「幸徳秋水の筆、木下尚江の舌」と称されたように尚江の演説は聴衆の心に残るものであったようです。またキリスト教人道主義の立場で日露戦争に反対し反戦小説『火の柱』『良人の自白』を連載します。1937（昭和12）年、尚江は病に倒れます。今回当館で購入した画像は、この年の3月尚江が知己の群馬県の牧師でジャーナリスト住谷天来^{すみ やてんらい}に宛てた書簡に含まれた自画像です。「天来兄 窓外春色 病野老」と記し、3月7日の病床で描いたことがうかがえます。半年後に尚江は亡くなるので、まさに最後の自画像といってよいでしょう。

当館にはこのほか近代史研究者^{ちはらかつ み}千原勝美氏（元信州大学教授）により寄贈された研究資料（9-11）があります。このなかに多数の木下尚江に関する研究論文が含まれており参考になります。



木下尚江の関係書籍（当館閲覧室でご覧いただけます）

自由大学運動100周年に向けて

小林多喜二が小説「蟹工船」を発表して80年目の2009(平成21)年、長野県俳人協会編『信濃句集』第41号に次の一句が掲載されました。

多喜二忌や 赤き表紙絵 兄の筆

この句は、船影を浮き立たせた赤い表紙がひととき印象的な初版単行本『蟹工船』(定本日本プロレタリア作家叢書第二篇・四六判仮綴222頁・1929年9月25日発行、戦旗社・70銭)を装丁した須山計一の実妹智佐恵の作品です。「多喜二忌」は2月20日。小林多喜二は、「蟹工船」を発表した4年後の1933(昭和8)年のその日に、治安維持法違反の疑いで検挙、拘引された築地の警察署で絶命。29歳の時でした。「赤き表紙絵」は、『蟹工船』の表紙画のこと。「兄の筆」は、描いた兄を偲んでのことでした。

戦前、下伊那郡鼎村(現飯田市鼎)一色の須山家には、地元青年会の会長を歴任し信南自由大学を創設、南信大衆党の結党(館蔵修史事業史資料)に奔走した長男賢逸、社会風刺漫画の描き手としてプロレタリア文化運動の渦中に身を投じた末に挫折、転向し洋画家の道を歩んだ次男計一、近衛騎兵隊に所属経歴を持つ三男國男、そして三人の兄を慕う末妹智佐恵の四人の兄妹がいました。

1923(大正12)年の春、長兄の賢逸は、猪坂直一ら信濃自由大学(のちの上田自由大学)関係者に接触し、自由大学創設趣旨や経緯を聞き、高倉輝から社会運動家の山本宣治(1889~1929)を信南自由大学講師役に紹介されています。賢逸は、山本の承諾に対する礼状「1923年11月24日、須山賢逸より山本宣治宛書簡」(京都府宇治市 花

やしき浮舟園蔵)の中で、信南自由大学開講の意義を「現在の教育が凡て一部階級の自家擁護の具となりつつあり、それがために学問の独立すら無視されつつある事に対して立ったプロレットカルト的内容を持つ点」にあること、また哲学者土田杏村の趣意書にある「労働しつつ学ぶ事が教育の本義である」とのことから、「あらゆる団体、あらゆる傾向のもの」も参加できる民間の教育機関であること、1921年11月に開講した信濃自由大学とは異なることを記述しています。山本との往復書簡から、その創設の目的とともに経緯がわかります。1924年1月8日、信南自由大学(のちの伊那自由大学)は上田に続き開講しました。

長兄の実践的な行動を身近にし、感化され思考を巡らしてきた弟計一の風刺漫画や回顧録等からは、資本主義の矛盾を問題視し、プロレタリア運動へ傾倒する中で意気軒昂たる多喜二と出会い、同志として、渦中に身を投じたことが読み取れます。計一は自らが反戦活動に傾倒し、志を同じくする多喜二との親交を深める中で激しい弾圧を受けました。計一がプロレタリア作家と遭遇したできごとは、労働者階級にあった一青年の思想形成過程上の必然として、兄の行った自由大学運動の延長線上に位置付けることができます。

智佐恵の一句が『信濃句集』に掲載された年、12月13日付『朝日新聞』に『蟹工船』などで知られるプロレタリア文学作家・小林多喜二が愛し続けた女性として知られる田口タキさんが6月19日、横浜市の自宅で亡くなっていたことが分かった。多喜二ゆかりの北海道小樽市立小樽文学館にタキさんの親族から連絡があった。102歳で老衰とみられる(後略)。との小さな記事が掲載されました。多喜二が見ることができなかった戦後日本、計一は信州の原風景を写生し油彩画など数多く残しています。

上田市、長野県は、生涯学習教育発祥地とされます。それは、全国に先駆け自由大学を開講させたことにあります。その記念すべき第1回開講から100周年を迎えようとしているのです。

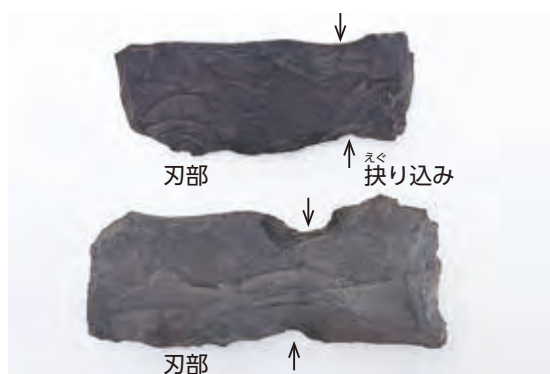
(伊藤友久)



山本宣治より須山賢逸宛の書簡(個人蔵)

弥生時代の石鎌について

当館所蔵の長野市篠ノ井遺跡群（高速道地点）の出土石器に、弥生時代中期を中心とする91点の打製刃器（石を打ち割って作った刃物）があります。この遺跡の発掘調査報告書で打製石庖丁と細別された刃器類の中に、「打製石鎌」と評価した石器（写真）があります。



石鎌とは

石鎌の名から推測されるのは、除草というよりは収穫です。この石器を取り扱う場合、大まかに2つの視点があります。根刈りと穂摘みなど収穫法に関わること、そして稲と雑穀など栽培食物に関わることです。いずれも植物の品種はもとより栽培法の検討が必須で、石器の機能そして用途研究を補完し食料生産の技術に迫ることができます。

用語としての「石鎌」の初見は1889年に遡ると思われ、今日の石匙や石製釣針などと呼称される石器も含み羽柴雄輔が使用しました。翌年「鎌の様な石器」としてイギリスの石器が紹介される中、今日の石小刀のような石器が加わり、さらに1920年には「石製鎌」として古墳時代の石製模造品までが、この石器の範疇に入りました。

1933年森本六爾は、磨製石庖丁が単に包丁のみならず穀物を刈る鎌でもあると評価し、これに似た「鎌形磨製石器」を「磨製石鎌」と名付け、「弥生式系石器」と位置づけました。また一方で縄文時代末期にある打製石庖丁を農具の鎌と推定しました。

1942年奈良県唐古遺跡の報告で、打製の刃器類を「鎌形打石器類」、「庖丁形打石器類」、「石小刀類」と分類し、弥生時代には石鎌類似の石器に幾つかの種類のあることを示しました。

戦後、1960年代には縄文農耕論の展開から栽培に関わる石器群の検討が進みます。1977年小林公明は縄文時代の大形の石匙から「鎌形石器=カマ」を抽出、「石鎌」と呼称した上で、畑作（ムギ作を推定）に用いられた農具と評価しました。1980年高木正文は縄文時代の収穫用石器として、打製石庖丁と「打製石鎌」を分析し、形態分類を行うとともに穂摘みと穂刈りの区別、さらに畑作穀物の収穫具を示唆しました。

1981年下関市綾羅木郷遺跡の報告で、弥生時代の石鎌に磨製と打製2者が認められ、弥生の「打製石鎌」呼称の発端となり今日に至っています。しかしながら報告文中はもとより、1985年『弥生文化の研究』で石鎌を担当した水島稔夫も、打製品の存否には慎重で、磨製石鎌未製品として、それが混在している可能性を述べています。

打製石鎌の評価

これまでの研究経過から、「打製石鎌」は縄文時代に成立した穂刈り用の収穫具で、その対象にムギなどの雑穀が推定される石器と解釈されます。弥生時代の「打製石鎌」に関しては、存否の再検証はもちろんのこと、唐古遺跡で提示された幾つかの類似器種を再検討し、全体像を明確にする必要があります。篠ノ井遺跡群の打製刃器中にも、「石鎌状を呈する資料」として報告されたものも、この種の石器に該当します。

写真の石器は、刃部が直線的で身幅が狭く全体の形が長方形状、長辺の端部に上下一対の装着用と観られるえぐり込みがあるのが特徴で、縄文の「打製石鎌」に製作技術的な系譜を求められそうです。弥生時代の収穫具に、このような石器の存在することを吟味し、食料生産の実態解明に少しでも迫ることができればと考えています。

※文中、敬称略

羽柴雄輔 1889年「石鎌と名付たき石器」東京人類学会雑誌46

森本六爾 1933年「日本原始農業」東京考古学会

小林公明 1977年「縄文中期八ヶ岳南麓における農具としての打製石器」信濃29-4

高木正文 1980年「九州縄文時代の収穫用石器」『鏡山猛先生古稀記念 古文化論攷』

水島稔夫 1985年「11.石鎌」『弥生文化の研究5』雄山閣

調べたいことがある方は
こちらどうぞ

閲覧室の紹介

当館2階にある閲覧室をご存知でしょうか。閲覧室には、日本史関係を中心に図書・雑誌10万冊以上を収蔵しており、閲覧することができます。館内コンピュータで蔵書検索もできます。また、閲覧申請をしていただければ、当館収蔵の文献史料(行政文書・古文書)や考古資料もご覧いただけます。専門家だけでなく、多くの方がたにご利用いただいております。写真は長野県PRキャラクターのアルクマが閲覧室を利用した時の様子です。

ご質問がある場合は、閲覧室に職員が常駐していますので、遠慮なく声を掛けてください。閲覧室のみのご利用は無料です。また、本の貸し出しは行っておりませんのでご承知おきください(申請をしていただければ撮影・複写は可能です)。

当館の閲覧室をぜひご利用ください。



閲覧申請をするアルクマ



閲覧中のアルクマ



「信州ミュージアムガイド」の公開

<http://nagano-museum.com/>



「信州ミュージアムガイド」トップ画面

長野県立歴史館をはじめ、県内100館以上の博物館・美術館が加盟している長野県博物館協議

会では、2017(平成29)年3月、ホームページ「信州ミュージアムガイド(長野県の博物館・美術館)」を公開しました。各加盟館の場所や連絡先、おもな収蔵品などの基本情報に加えて、加盟館自身によるタイムリーな最新情報が発信されます。

利用者にとっては、地域別、ジャンル別などの多様な施設検索により、各館の企画展やイベント情報などを閲覧できますので、当館ホームページ

(<http://www.npmh.net>)とともにぜひご利用ください。

INFORMATION

インフォメーション

■2017(平成29)年 9月～12月の行事予定

9月

休館日
4・11
19・25

巡回展

長野県の遺跡発掘2017

安曇野市豊科郷土博物館
8/26(土)～9/24(日)

■講演会

9/2(土) 13時30分～15時

- 「象嵌装大刀を持ったシナノの舎人たち」
講師 西山克己(当館考古資料課長)

9/16(土) 13時30分～15時

- 「黒耀石のみちを考える」
講師 大竹憲昭(当館総合情報課長)

■展示解説デー

8/26(土)、9/9(土) 10時～13時30分～

講座・イベント

古文書講座

初級 第4回
A 9/3(日)
B 9/14(木)
中級 第4回
A 9/2(土)
B 9/14(木)
上級 第5回
9/30(土)

考古学講座

第2回 9/30(土)
(秋季企画展講座参照)

古文書講座

初級 第5回
A 10/8(日)
B 10/19(木)
中級 第5回
A 10/7(土)
B 10/19(木)

遺跡探訪会

10/14(土) 埼玉・群馬方面

考古学講座

第3回 10/21(土)
13時30分～15時
●「稲作の開始と渡来石器
～磨製石庖丁の生産～」
講師 町田勝則
(当館学芸員)

森將軍塚まつり

11/3(金・祝)

考古学講座

第4回 11/18(土)
13時30分～15時
●「古代銭貨の使われ方」
講師 西山克己
(当館考古資料課長)

やさしい信濃の歴史講座

in 箕輪
会場 箕輪町郷土博物館
11/25(土)

近世史セミナー

12/3(日)

やさしい信濃の歴史講座

第1回 12/9(土)
第2回 12/23(土・祝)

10月

休館日
2・10
16・23
30

秋季企画展

進化する縄文土器

～流れるもようと区画もよう～
9/16(土)～11/26(日)

■トークセッション

9/16(土) 13時30分～15時

- 「火焔土器前夜の新潟・北陸と
中部高地の土器」
講師 寺嶋裕助氏(新潟県考古学会会長)
寺内隆夫(当館学芸員)

■講座

9/30(土) 13時30分～15時

- 「焼町vs勝坂～競い合い、高め合う縄文中期の土器装飾」
講師 寺内隆夫(当館学芸員)

■講演会

10/28(土) 13時30分～15時

- 「パプア・ニューギニアの土器作りと縄文土器」
講師 高橋龍三郎氏(早稲田大学教授)

■イベント

毎週日曜・祝日

- 「土器写生・ぬりえ」
11/25(土) 13時30分～15時
- 「縄文風リース作り・ゾートロープ作り」
11/26(日) 13時30分～15時
- 「土器写生・ぬりえ優秀作品表彰式」

11月

休館日
6・13
20・24
27・28

巡回展

長野県の遺跡発掘2017

浅間縄文ミュージアム(御代田町)
9/30(土)～11/26(日)

■トークライブ

11/11(土) 13時30分～15時

- 「黒耀石が語る信州の石器時代」
講師 堤 隆氏(浅間縄文ミュージアム)
大竹幸恵氏(長和町教育委員会)
大竹憲昭(当館総合情報課長)

■展示解説デー

10/7(土)、11/4(土) 10時～13時30分～

12月

休館日
4・11
18・
25～31

冬季展

博物館の父は信州人

～「虫捕御用」の明治維新～
12/16(土)～2/25(日)

表紙の写真の解説

流れるもようと区画もようの土器

縄文時代中期中葉の中ごろ(約5,300～5,100年前)、渦巻きや流れる線で飾る北陸～東・北信と、横や縦方向に区画・分帯し顔面や動物の装飾をつける中・南信～西関東で、大きく異なる土器が発達しました。

上左: 六反田南遺跡(新潟県埋蔵文化財センター蔵)

上右: 熊久保遺跡(朝日村歴史民俗資料館蔵)

下左: 海道前C遺跡(山梨県立考古博物館蔵)

下右: 藤内遺跡(富士見町井戸尻考古館蔵)

行事アルバム

** 歴史館ふるさと講座(6/3～7/1) **



6月3日から7月1日までの毎週土曜日、歴史館ふるさと講座を当館講堂で開催しました。今回は「自然と向かい合い、暮らしを築く」のテーマで、災害を軸に考古学、歴史学などの立場から5人の方の報告がありました。毎回大勢の皆さんが熱心に聴講されました。

*** 歴史館で夏休み(8/5) ***



夏休み特別企画「歴史館で夏休み」では、石のアクセサリーづくり、プラ板マスコットづくり、縄文人になって遊ぼう!、バックヤード探検の4つの体験イベントを実施し、多くの方がたにお楽しみいただきました。石のアクセサリーづくりでは、猛暑の中でしたが、時間を忘れ、熱心に石を磨く子どもたちの姿が見られました。体験を通し、歴史に触れる貴重な機会になったようです。

長野県立歴史館たより 秋号 vol.92

2017(平成29)年9月1日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail: rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ: <http://www.npmh.net/>

印刷 奥山印刷工業株式会社